

源平盛衰記

下卷

明治四十五年六月八日印刷

源平盛衰記下卷

明治四十五年六月十一日發行

定價金八拾五錢



編輯兼
發行者

東京市神田區錦町一丁目十九番地

三浦理

印刷者

東京市京橋區築地三丁目十一番地

野村宗十郎

印刷所

東京市京橋區築地二丁目十七番地
株式會社東京築地活版製造所

發行所

東京市神田區錦町一丁目十九番地

有朋堂書店

大賣捌所

東京市神田區裏神保町一番地

三省堂書店

同

大阪市東區南本町四丁目

三宅莊藏書店

源平盛衰記下卷目錄

第二十六卷

木曾謀叛事	一
兼遠起請事	四
尾張國目代早馬事	七
平家東國發向 附大臣尊勝陀羅尼事	七
義基法師首渡事	八
知盛所勞上洛事	九
宇佐公通脚力 附伊豫國飛脚事	一〇
入道得病 附平家可亡夢事	一二
御所侍酒盛事	一八
蓬壺燒失事	一九
馬尾鼠巢例竝福原怪異事	二〇
入道非直人 附慈心坊得閻魔	二〇
請事	二二
祇園女御事	二五
忠盛婦人事	二八

第二十七卷

天智懷妊女賜大織冠事	三一
平家東國發向竝邦綱卿薨去同思慮	三一
賢事	三二
如無僧都烏帽子同母放龜 附毛寶	三三
放龜事	三六
行尊琴絃 附靜信箸事	三八
法住寺殿御幸 附新日吉新熊野事	三九
墨俣川合戰 附矢矯川軍事	四一
太神宮祭文東國討手歸洛 附天下餓	四一
死事	四六
賴朝追討廳宣 附秀衡系圖事	五一
信濃橫田川原軍事	五二
周武王誅紂王事	六一
資永中風死事	六三
源氏追討祈事	六四
奉幣使定隆死去 附覺算寢死事	六五
實源大元法事	六七

大嘗會延引事	六七
皇嘉門院薨御 附覺快入滅事	六八
法住寺殿移徙事	六九

第二十八卷

天變 附蹈歌節會事	七一
役行者事	七二
顯眞一萬部法華經事	七四
宗盛補大臣 竝拜賀事	七六
賴朝義仲中惡事	七九
源氏追討使事	八四
經正竹生島詣竝仙童琵琶事	九〇
齊明射臺目一事	九八
源氏落燧城一事	九九
北國所々合戰事	一〇三

第二十九卷

般若野軍事	一〇七
平家礪竝志雄二手事	一〇七

三箇馬場願書事	一〇八
俱梨伽羅山事	一一三
源氏軍配分事	一二四
新八幡願書事	一二六
礪竝山合戰事	一二九
平家落上所々軍事	一二八
俣野五郎竝長綱亡事	一三二
妹尾竝齊明被虜事	一三四

第三十卷

眞盛被討 附朱買臣錦袴竝新豐縣翁事	一三七
平氏侍共亡事	一四二
赤山堂布施論事	一四五
太神宮行幸願 附廣嗣謀叛竝玄昉僧正事	一四六
賀茂齋院八幡臨時祭事	一四八
平家延曆寺願書事	一四九
貞能自西國上洛事	一五三
維盛兼言事	一五五

平家兵被 _レ 向 _二 宇治勢多 _一 事	一五六
木曾山門牒狀事	一五七
覺明語 _二 山門 _一 事	一六一
山門僉議牒狀事	一六四

第三十一卷

木曾登山 附勢多軍事	一六七
鞍馬御幸事	一六九
平家都落事	一七一
維盛惜 _二 妻子遺 _一 事	一七四
畠山兄弟賜 _レ 暇事	一八二
經正參 _二 仁和寺宮 _一 事	一八三
青山琵琶流泉啄木事	一八五
賴盛落留事	一九一
貞能參 _二 小松殿墓 _一 附小松大臣如	一九二
法經事	一九二

第三十二卷

落行人々歌 附忠度自_レ淀歸謁_二俊

成 _二 事 _一	一九七
刈田丸討 _二 惠美大臣 _一 事	二〇四
圓融房御幸事	二〇六
義仲行家京入事	二〇七
法皇自 _二 天台山 _一 還御事	二〇八
福原管絃講事	二一〇
四宮御位事	二一六
維高維仁位論事	二二〇
阿育王即位事	二二五
義仲行家受領事	二二七
平家著 _二 太宰府 _一 附北野天神飛梅	二二八
還俗人即位例事	二二九

第三十三卷

太神宮勅使 附緒方三郎責 _二 平家 _一 事	二三三
平家太宰府落並平氏宇佐宮歌 附清	二三九
經入 _レ 海事	二四二
平氏九月十三夜歌讀事	二四二

平氏著屋島事	二四四
時光辭神器御使事	二四五
賴朝征夷將軍宣附康定關東下向	二四七
事	二四七
光隆卿向木曾許附木曾院參預事	二五一
源平水島軍事	二五六
木曾備中下向齊明被討並兼康討	二五九
倉光事	二五九
兼康板藏城戰事	二六三
依行家謀叛木曾上洛事	二六六
行家與平氏室山合戰事	二六六
木曾洛中狼藉事	二六九

第三十四卷

木曾可追討由附木曾怠狀舉山	二七三
門事	二七三
法住寺城郭合戰事	二七五
明雲八條宮人々被討附信西相明	二八〇
雲事	二八〇
法皇御歎竝木曾縱逸附四十九人止	二八〇

第三十五卷

官職事	二八九
公朝時成關東下向附知康藝能事	二九二
範賴義經上洛附賴朝遣山門牒狀	二九五
事	二九五
木曾擬與平家竝維盛歎事	二九六
木曾內裏守護附光武誅王莽事	二九八
京屋島朝拜無之附義仲將軍宣事	三〇〇
東國兵馬汰竝佐々木賜生唆附	三〇二
象王太子事	三〇二
範賴義經京入事	三一三
高綱渡宇治河事	三一九
木曾惜貴女遺事	三二九
義經院參事	三三二
東使戰木曾事	三三四
巴關東下向事	三三七
粟津合戰事	三四四
木曾頸被渡事	三五五
兼光被誅竝沛公入咸陽宮事	三五三

第三十六卷

一谷城構事	三五五
能登守所々高名事	三五七
福原除目 附將門稱平親王事	三五九
維盛住吉詣竝明神垂跡事	三六一
忠度見ニ名所々々 附難波浦賤夫婦事	三六二
維盛北方歎竝梶井宮遣ニ全眞歌事	三六四
福原忌日事	三六六
源氏勢汰事	三六七
義經向ニ三草山事	三七〇
平氏嫌ニ手向 附通盛請ニ小宰相局事	三七五
清章射鹿竝義經赴ニ鴨越事	三七七
鷲尾一谷案内者事	三八一
熊谷向ニ大手事	三八六

第三十七卷

熊谷父子寄ニ城戸口ニ竝平山同所來

第三十八卷

附成田來事	三九一
平家開ニ城戸口ニ竝源平侍合戰事	三九六
景高景時入城竝景時秀句事	四〇一
義經落ニ鴨越竝畠山荷馬 附馬因緣事	四〇六
則綱討ニ盛俊事	四一
一谷落城竝重衡卿廢事	四一四
忠度通盛等最後事	四二〇
知盛遁ニ戰場ニ乘船事	四二五
平家公達最後竝頸共掛ニ一谷事	四二六
熊谷送ニ敦盛頸竝返狀事	四三三
小宰相局 附慎夫人事	四三六
平家首掛ニ獄門 附維盛北方被見頸事	四四七
重衡京入竝定長問答事	四五二
重國花方帶ニ院宣西國下向同上洛奉ニ返狀事	四五五

第三十九卷

友時參重衡許 附重衡迎內裏女

房事 四六一

重衡請法然房事 四六八

重衡關東下向 附長光寺事 四七一

賴朝重衡對面事 四七五

重衡酒宴 附千壽伊王事 四七八

維盛出屋島參詣高野 附粉川寺

謁法然房事 四八五

時賴橫笛事 四九〇

第四十卷

法輪寺 附中將相見瀧口竝高野山

事 四九九

觀賢拜弘法大師之影像 附弘法入

唐事 五〇三

維盛出家事 五〇八

唐皮小烏拔丸事 五二二

維盛入道熊野詣 附熊野大峯事 五一六

第四十一卷

中將入道入水事 五二四

賴朝敘正四位下 附崇德院遷宮

事 五三三

忠賴被討 附賴朝關東下向事 五三四

義經關東下向 附親能擲義廣竝除

目事 五三七

三日平氏 附維盛舊室歎夫別竝平

氏歎事 五三八

新帝御即位 附義經蒙使宣竝伊勢

瀧野軍事 五四三

屋島八月十五夜 附範賴西海道下向

事 五四四

盛綱渡藤戶兒島合戰 附海佐介渡

海事 五四六

義經拜賀御禊供奉 附實平自西海

飛脚事 五五二

被行大營會 附賴朝條々奏聞事 五五四

義經院參西國發向 附三社諸寺祈禱

事……………五五七
平家人々歎 附梶原逆櫓事……………五五八

第四十二卷

義經解纜四國渡 附資盛清經頌可

上三京都由事……………五六三

勝浦合戰 附勝磨竝親家屋島尋承

事……………五六七

金仙寺觀音講 附六條北政所使逢

義經一事……………五七〇

屋島合戰 附玉蟲立扇與一射扇

事……………五七四

源平侍共軍 附繼信盛政孝養事……………五八九

第四十三卷

滿增同意源氏 附平家志度道場詣

竝成直降人事……………五九七

住吉鎬竝神功貴新羅 附住吉諏訪

竝諸神一階事……………六〇一

源平侍遠矢 附成良返忠事……………六〇三

知盛船掃除 附占海鹿竝宗盛取替

子事……………六〇九

二位禪尼入海竝平家亡虜人々 附京

都注進事……………六一一

安德帝不吉瑞竝義經上洛事……………六二二

神鏡神璽還幸事……………六二五

第四十四卷

神鏡神璽都入竝三種寶劍事……………六二七

老松若松尋劍事……………六三三

平家虜都入 附癩人法師口說言竝戒

賢論師事……………六三九

大臣殿舍人 附女院移吉田竝賴朝

敘二位一事……………六四四

宮人曲內侍所效驗事……………六四六

時忠卿罪科 附時忠智義經事……………六四八

賴朝義經中惡 附屋島內府子副將亡

事……………六五〇

女院出家 附忠清入道被切事……………六五四

第四十五卷

內大臣關東下向	附池田宿遊君事	六五九
女院御徒然	附大臣賴朝問答事	六六六
虜人々流罪	附伊勢勅使改元有否事	六六九
內大臣京上被斬	附重衡向三南都被切竝大地震事	六七三
源氏等受領	附義經任三伊豫守事	六九〇

第四十六卷

南都御幸大佛開眼	附時忠流罪忠快免事	六九三
女院三入寂光院事		七〇〇
賴朝義經中違事		七〇一
土佐房上洛事		七〇五
高直被斬竝義經申三廳下文	附義經惜三女遺事	七一〇
義經行家出都竝義經始終有樣事		七一二
時政實平上洛	附吉田經房卿御廉直事	七二三

尋三害平家小兒	附關官恩賞人々事	七二五
---------	----------	-----

第四十七卷

北條上洛尋三平孫	附觸腰尼御前事	七二九
六代御前事		七三六
文覺關東下向事		七四二
六代蒙免上洛	附長谷觀音竝稽文佛師事	七五〇

第四十八卷

女院吉田御住居同御出家事		七五九
大臣父子自鎌倉上洛	附女院寂光院入御事	七六二
法皇大原入御事		七六五
女院六道廻物語事		七八一

源平盛衰記下卷總索引		七九五
------------	--	-----

源平盛衰記 下卷

濃卷 第二十六

○木曾謀叛事

信濃國安曇郡に、木曾と云山里あり。彼所の住人に、木曾冠者義仲と云は、故六條判官爲義が孫、帶刀先生義賢には二男也。義仲爰に居住しける事は、父義賢は、武藏國多胡郡の住人秩父二郎大夫重澄が養子也。義賢武藏國比企郡へ通りけるを、去久壽二年二月に、左馬頭義朝が嫡男惡源太義平、相模國大倉の口にて討てけり。義賢は義平には叔父なれば、木曾と惡源太とは従父兄弟也。父が討れける時は木曾は二歳、名をば駒王丸と云。惡源太は義賢を討て京上しけるが、畠山庄司重能に云置けるは、駒王をも尋出して必害すべし、生残りては後惡るべしと。重能慥に承ぬとは云たりけれ共、いかゞ二

世にある者
―世に榮え
たる者

かこちぐさ
―思出の記
念物

甲に―剛に

歳の子に刀をば振べき、不便也と思ひて、折節齋藤別當眞盛が、武藏へ下たりけるを悦
て、駒王丸を母にいだかせて、是養給へと云やりたりければ、眞盛請取て、七箇日おき
て案じけるは、東國と云は皆源氏の家人也、怒に養置て討れたらんも無憑甲斐、討せ
じとせんも身の煩たるべし、兎も角も難叶と思て、木曾は山深き所也、中三權頭は世に
ある者也、隠し養て、人と成たらば主とも憑めかしとて、母に懷かせて信濃國へ送遣
す。齋藤別當情あり。母懷に抱へて、泣々信濃へ逃越て、木曾中三權頭に見參して、懷
出して云様は、我女の身也、甲斐々々敷養立とも覺えず、深く和殿を憑也、養立て神
あらば子にもし、百に一も世にある事もあらば、かこちぐさにもし候へ、悪くば從者に
も仕ひ候へと云。兼遠哀と思ひける上、此人は正く八幡殿には四代の御孫也、世中の淵
は瀬となる喩あり、今こそ孤子にて御座とも、不知世の末には、日本國の武家の主とも
成やし給はん、如何様にも養立て、北陸道の大將軍になし奉て、世にあらんと思ふ心有
ければ、憑もしく請取て、木曾の山下と云所に隠し置て、二十餘年が間育み養けり。然
べき事にや、弓矢を取て人に勝れ、心甲に馬に乘て能、保元平治に源氏悉く亡ぬと聞え
しかば、木曾七八歳のをさな心に不安思て、哀平家を討失て世を取ばやと思ふ心あ

あてがふ一
試み合す

り。馬を馳弓を射も、是は平家を責べき手習とぞあてがひける。長大の後兼遠に云けるは、我は孤也けるを、和殿の育に依て成人せり、懸るたよりなき身に、思立べき事ならね共、八幡殿の後胤として、一門の宿敵を徐に見るべきに非ず、平家を誅して世に立ばやと存ず、いかゞ有べきと問。兼遠ほくそ咲て、殿を今まで奉育本意、偏に其事にあり、憚候事なかれと云ければ、其後は木曾、種々の謀を思ひ廻して、京都へも度々忍上て伺けり。片山陰に隠れ居て、人にもはかぐしく不見知ければ、常は六波羅邊にたゝすみ伺けれ共、平家の運不盡ける程は、本意を不遂けるに、高倉宮の令旨を給りけるより、今は憚るに及ばず、色に顯て謀叛を發し、國中の兵を驅從へて、既に千餘騎に及べりと聞ゆ。木曾と云所は究竟の城郭也。長山遙に連て禽獸猶希に、大河漲下て人跡又幽也。谷深く梯危くしては足を踏て歩み、峯高く巖稠しては眼を載て行く。尾を越え尾に向て心を摧、谷を出で谷に入て思ひを費。東は信濃、上野、武藏、相模に通て奥廣く、南は美濃國に境、道一にして口狹し。行程三日の深山也。縦數千萬騎を以ても責落すべき様なし、況棧梯引落して楯籠らば、馬も人も通ふべき所に非。義仲爰に居住して謀叛を起し、責上て平家を亡すべしと聞えければ、木曾は信濃にとりても

南の端、都も無下に近ければ、こはいかゞせんと上下騒けり。

○兼遠起請事

平家大に驚き、中三權頭を召上て、如何に兼遠は木曾冠者義仲を扶持し置き、謀叛を起し、朝家を亂らんとは企つなるぞ、速に義仲を搦進すべし、命を背かば汝が首を刎らるべしと被下知ければ、兼遠陳じ申て云、此條且被聞召候けん、義仲が父帶刀先生義賢は、去久壽の比、相模國大倉の口にて、甥の惡源太義平に被討侍き、義仲其時は二歳になりけるを、恩愛の道の哀さは、母惡源太に恐て、懷に入ていかゞせんと歎申しかば、一旦哀に覺えて請取て、今まで孚置て侍れ共、謀叛の事努々虚言也、人の讒言などに候か、但御説の上は、身の暇を給て國に下、子息共に心を入て可搦進と申右大將家重て仰には、身の暇を給はんと思はば、義仲を可搦進之由、起請文を書進べし、不然者、子息家人等に仰て、義仲を搦進せん時、本國に可返下也と有ければ、兼遠思けるは、起請をかくでは難遁、書ては年來の本意空かるべし、いかゞすべきと案じけるが、縦命は亡とも、義仲が世を知んこそ大切なれ、其上心より起て書起請ならず、

右大將家—
宗盛

牛王の裏—
熊野神社護
符の裏

七耀—日月
と火水木金
土の五星

神明よも悪しとおほしめさじ、加様の事をこそ乞索壓狀とて、神も佛も免され候なれと思成て、熊野の牛王の裏に、起請文を書進す。其狀に云、
謹請再拜々々

早依有謀叛企可搦進木曾冠者義仲由起請文事

右 上 奉始梵天帝釋、四大天王、日月三光、七耀九星、二十八宿、下内海、外海、龍

神八部、堅牢地祇、冥官冥衆、日本國中、七道諸國、大小諸神、鎮守王城、諸大明神、

驚申而白、木曾冠者義仲者、爲六孫王之苗裔、繼八幡殿後胤弓馬之家也、武藝

之器也、依之被引源家之執心、爲謝宿祖之怨念、相語北陸諸國之凶黨、擬

滅平家一族之忠臣之由、有其聞、甚以濫吹也、早仰養父中三權頭兼遠而可

搦進彼義仲云々、謹蒙嚴命一畢、任被仰下之旨、速可搦進義仲、若偽申

者、上件之神祇冥衆之罰於、兼遠之八萬四千之毛孔仁蒙天、現世當來、永神明佛陀之

利益仁可奉漏之起請狀如件。

治承五年正月日

中原兼遠

とぞ書たりける。依之平家憑もしく思はれければ、中三權頭を被返下、兼遠國に下て思

責も―無理
にも

世におはせ
よ―世に榮
えられよ

ひけるは、起請文は書つ、冥の照覽恐あり、又起請に恐れれば日比の本意無代なるべし、いかゞせんと案じけるが、責も義仲を世に立んと思ふ心の深かりければ、本望をも遂起請にも背かぬ様に、當國の住人根井滋野行親と云者を招寄せて云ひけるは、此木曾殿をば、幼少二歳の時より懷育み奉て、世に立候はん事をのみ深く存侍き、成人の今に、高倉宮の令旨を給て、平家を亡さんとする處に、兼遠を召上て、乞索壓狀の起請文を被召畢ぬ、此事黙止せん條本意に非ず、されば木曾殿を和殿に奉らん、子息共は定て參侍べし、心を一にして平家を討亡て、世におはせよとてとらせける志こそ恐しけれ。行親木曾を請取て、異計を當國隣國に回し、軍兵を木曾の山下に集けり。懸りければ、故帶刀先生義賢の好にて、上野國の勇士、足利の一族已下、皆木曾に相從、平家を亡さんとひしめきけり。平家此事を聞て沙汰有りけるは、越後國住人城太郎資永は、當家大恩の身として多勢の者也、縦木曾信濃國の兵を相語と云共、資永が勢に並べんに、十分の一に及べからず、只今討て進らせなん、あながちに驚騷べからずとは云けれ共、東國の背だにも淺増きに、北國さへ懸ければ、直事に非ずと申あへり。